

千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム

私たちの柏の歴史

— 牧から街へ —

History of *Kashiwa*



全体の目次

前書き	p. 1
序章 現代—柏の葉地区の歩み—	p. 2
第1章 原始古代	p. 12
I 柏の遺跡	p. 13
第2章 中世	p. 33
I 古代から戦国時代の柏市域	p. 35
II 柏市の製鉄遺跡	p. 50
第3章 近世	p. 57
I 江戸時代の柏と小金牧	p. 59
II 柏の水運—手賀沼と利根川の開拓と物流—	p. 74
第4章 近代	p. 85
I 小金牧の開墾—十余二地区を中心として—	p. 86
第5章 柏市の農業	p. 93
I 昭和から平成までの変遷	p. 94
II 柏市の農業 トピックス	p. 105
第6章 (小金牧) 十余二開墾物語	p. 116
I 小金牧の開墾—入植時の苦労話—	p. 117
II 十余二の土壌と栽培作物に関する話	p. 118
III サツマイモ・農業に関する話	p. 119
IV 柏飛行場の開設に関する話	p. 120
V 戦後の農地改革・金属工業団地に関する話	p. 120
柏市とその周辺の歴史年表	p. 122
制作メンバー一覧	p. 126

はじめに

この書籍の制作は、2017年の千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム A コース『柏の歴史、文化、産業』の開講がきっかけになっています。柏市に長年居住している人でも、柏地域の歴史や文化、そして経済についてよく知っているわけではありません。そこで、柏市のことを勉強するというプログラムが企画されました。

このプログラムを通して柏市の歴史に興味を持った市民が集まり、大学と一緒に、地域の歴史について勉強したり、調べたりして、この書籍を完成させました。2018年1月20日に第1回のミーティングが開催され、2020年2月22日まで20回以上のミーティングを重ねて作りあげました。

地球上のどこの地域にも、地域ごとに先人たちの歴史があります。その歴史が幾重にも積み重なり、私たちが生活している現代に繋がっています。この書籍は千葉大学柏の葉キャンパスが位置する十余二地域を中心にして、まとめてあります。この書籍を手にとった方がこの地域の歴史を知ること、この地域への愛着を少しでも持っていただけたら幸いです。

なお、2017年の千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラムは柏市教育委員会文化課と経済産業部に協力していただきました。そして、この書籍の作成には、プロジェクトの立ち上げ当初から柏市教育委員会文化課に多大なるご協力いただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

2020年9月1日

千葉大学環境健康フィールド科学センター
野田勝二

第4章 近代

目次

I 小金牧の開墾 一十余二地区を中心として一	
1. 概要	p. 86
2. 牧の廃止と開墾会社	p. 86
(1) 牧の廃止	p. 86
(2) 開墾会社の成立	p. 87
(3) 入植者の選別と入植	p. 87
(4) 開墾会社の解散と土地所有権をめぐる争い	p. 88
(5) 三井組の施策	p. 90
(6) 開墾事業の実態	p. 90
3. 軍事基地	p. 91
(1) 陸軍飛行場の建設	p. 91

I 小金牧の開墾 一十余二地区を中心として一

1. 概要

江戸時代、幕府の御用牧であった小金牧は、明治維新により大量に発生した失業武士や武士に依存して生活していた町人の困窮者を救済し、江戸の治安を守るための授産事業として開墾されることになりました。明治新政府は、東京の富民（裕福な商人）に会社を作らせて、開墾を請け負わせることとしました。入植者は相応の土地を与えられ、独立農民として安定した生活を保障されるはずでしたが、開墾は困難を極め、会社は3年で解散。入植者は5反5畝の土地を分与されただけで、そのほかの耕作地は開墾会社の社員（富裕な商人）の個人的な小作地とされてしまいました。この土地の所有権をめぐる裁判が行われ、当地の農民は長い裁判闘争を戦っていくことになりました。

軍事色が強くなったころ、柏は首都防衛の前線基地と位置付けられました。十余二には陸軍の飛行場が建設され、周辺にも軍関係の施設が多く作られて、戦争遂行の一翼を担っていきました。

2. 牧の廃止と開墾会社

(1) 牧の廃止

江戸時代、下総台地の幕府の御用牧（小金牧・佐倉牧）では、野馬が放牧されていました。牧の周辺の農村は野付村として、馬の管理や野馬土手の修復整備などに駆り出され、相当の負担を負っていました。しかし牧の中にある林から出る木材や薬草の採取、薪の製造や木材の運搬などの駄賃稼ぎなどで、それなりの収入を得ていました。また野馬が定期的に払い下げられ、農耕や運送に利用できたので、牧の存在は農民にとって相互依存的な利益にもなっていました。そのため、江戸幕府が崩壊したときには、牧の管理を任されていた牧士から、牧の存続を願い出る書面が提出されました。

ところが大政奉還によって多くの武士が浪人となり、また武士に依存して生計を立てていた職人などが困窮し、江戸在住者の約2割が極貧民・極々貧民に分類されるほどになったのです。そのため当初、明治新政府は野付村の開墾を一部認めて牧を縮小しながら維持していく方針でしたが、その後明治2(1869)年4

月東京窮民を入植させ開墾させるために、牧を完全に廃止することに方針を転換しました。

(2) 開墾会社の成立

開墾事業を委託された東京府は、明治2(1869)年3月開墾役所を設置し、現地の葛飾県と協議して4月22日に「開墾大意」を作成し、事業遂行の機関として民間の開墾会社を設置することを企画し、政府に進言しました。

政府は新たに開墾局を設置しました。そして、20万両を下げ渡し、明治2(1869)年5月、三井八郎右衛門を惣頭取そうとうどりに開墾会社を設立させ事業に着手させました。

開墾局は「開墾授産取扱内則」を定め、窮民に対し3か年の衣食住の保証や、すべての諸費用は会社で負担すること、手作り地は1人につき5反歩とし他に宅地として1軒に5畝歩の土地を割り当てるなどの救済方法を詳しく規定しました。

これらの窮民を一人前の独立農夫に仕上げるため、まず東京の授産場に彼らを集めて職業訓練が行われました。

開墾場は入植順に13の地域に分けられ、それぞれ名前が付けられました。十余二は12番目の入植地で、その地域は小金牧のうち高田台牧にあたり、その受け持ち社員は三井八郎右衛門でした。

(3) 入植者の選別と入植

明治2(1869)年10月から順次入植がはじまりました。募集人員1万人のところ応募者約8千人。はじめは士族の移住を計画していましたが、生活困窮は町人のほうが厳しく、あまり準備のできていない町人も急遽送り込まれたようです。入植者は東京の窮民を救済するとの意向が重視されたため、高齢者や病人なども多く、開墾者としては不向きな者が多く含まれていたようです。また当初計画されていた牧周辺の地元農民の開墾願いは開墾地の不足により取りやめとなりました。この地元農民は、自力で開墾し、また入植者の農業指導をすることを期待されていました。しかしこの地元農民が参加しなくなったことで、農業に不慣れな東京窮民の開墾成功はおぼつかないこととなってしまいました。

十余二は野馬の捕込とっこめが遅れたことから、明治4(1871)年2月に東京から8戸

27 人が入植しました。これはほかの開墾場が過剰入植者に悩んでいたのに比べるとかなり少ない人数です。十余二地区を引き受けた三井組が、開墾会社の社員の小作人になる約束で入植してくる近在窮民を積極的に受け入れたためとも思われます。彼らは野付村から通う出作開墾人と、近在農村からの移住者である移住開墾人でした。

(4) 開墾会社の解散と土地所有権をめぐる争い

明治2(1869)年10月から始められた入植開墾は、なかなかはかどらなかつたようです。原野の開墾は予想外の困難を伴い、江戸での生活を忘れることができず、江戸へ逃げ帰る者が続出しました。明治3(1870)年春にはすでに最初の脱村者が現れています。会社はこのままでは開墾の成功はおぼつかないことを察して、「教責場」という懲罰施設まで作って監視を厳しくしましたが、離脱者は後を絶ちませんでした。明治3(1870)年9月会社は貸渡米の廃止を通告しましたが、その前に暴風雨がこの地域を襲い、大きな被害が出たため、廃止ではなく1日5合を3合に減らすことにしました。入植者たちの不満は大きく、大規模な「沸騰」(集団行動)が度々発生しました。明治4(1871)年7月台風が襲来し、開墾地は壊滅的な被害を受けました。開墾地は周囲に防風林などがない原野状態であったため、風の被害を受けやすかったのでしょう。多くの農舎が倒壊し、その再建に多大な費用が必要となりました。会社はその対策のため、政府に対し拝借金とさらなる土地の引き渡しを要望しました。そしてその要望が認められなければ事業の廃止を表明しました。政府では民部省の廃止に伴い開墾事業は東京府の管轄となりました。さらに地元葛飾県へ移管することが提言されました。開墾会社は何度かの嘆願の後、明治5(1872)年3月御下賜金20万両は下げ渡しとし、これまで窮民に貸与したものは費用も農舎もすべて渡切として独立農夫とした。独立農夫となった開墾人への救助は、以後一切否定するという最終提案をしました。これは4月に政府から認められ、その後の開墾地の管理は新設された印旛県へ引き渡されることになりました。

開墾会社は当初、佐倉牧・小金牧の土地を45,000町歩と判断していました。ところが牧地の中には野付村が権利を持っている請地があり、これは開墾会社に引き渡されませんでした。また佐倉牧の一部が開墾から外されました。その結

果、開墾会社に渡された土地は10,170町歩となり、当初見込みの約4分の1となっていました。また開墾人に3年間の生活を約束していましたが、深い根拠もなく、開墾が始まれば費用も掛からなくなるだろうと考えていました。しかし開墾の困難と種々の見込み違いにより利益が出せなくなった会社は、明治5(1872)年5月ついに解散することになりました。この時開墾人には手作り地(5反)と家作地(5畝^{注1})が与えられ、その他の諸費用、農舎、農具も返済の義務を免れました。しかし以後は扶助などの嘆願をしない誓約をさせられました。開墾人は1戸3町歩の土地を分与されるはずでしたが、それが5反5畝になりました。また自力で開墾を行うものは耕作地の所有を認められるはずでしたが、規則が変更されていく過程でこの権利は消滅してしまいました。また明治5(1872)年の地租改正に伴う地券の発行に際し、開墾人への地券発行は明治7(1874)年に実行されましたが、近傍村々から移住あるいは通いで自力開墾した者には地券が発行されませんでした。彼らは、会社に小作証文を差し出して少額の手間賃を受け取っていました。東京窮民に分与された以外の土地は、本来開墾会社に属するものでありましたが、会社清算の際、出資金の相殺のため会社員(富裕商人)個人の名義とされました。そのため自力開墾者の小作証文も会社員個人あてのものとされてしまいました。

明治6(1873)年6月、自力で開墾したにもかかわらず小作人にされた豊四季・十余二などの自力開墾者は小作料不払いを行い、会社側はそれに対して小作地の引き上げを図り争いが激化し、裁判が始まりました。裁判の中で、小作料滞納として会社側が逆に裁判を起し、農民は敗訴して裁判費用まで負担させられることとなりました。農民側は千葉県に種々の請願を繰り返しました。また控訴に加え、内務省請願という大衆行動にも訴えました。これには東京窮民も参加し、より大きな運動となりました。農民たちは開墾会社の経理の虚偽性まで言及し、開墾地を社員の私有地化したことの根拠を質すなど開墾事業の構図に疑問を呈し、会社側が回答に窮するような場面もしばしばありました。しかし裁判は農民側の敗訴が続き、農民は大審院に上告しました。その時期に三井組の土地は裁判所に力を及ぼすことができる政府高官の名義に書き換えられ、結局農民の訴えは大審院においても棄却され、農民への強制執行が行われました。

長引く争議に千葉県も介入を余儀なくされたらしく、明治13(1880)年、旧

会社社員から1反5円で所有地の一部を買い取り、県有地も併せて、開墾に関わった農民たちに1反1円で下げ渡しました。その地は開墾に見合うほどのものではありませんでしたが、裁判費用などで疲弊していた農民は、県の調停に服して裁判から手をひくものも多くいました。しかし一部には、あくまでも自分たちの権利を主張して告発・請願を繰り返し、長い闘争を続けるものもいました。この過程では足尾鋇毒事件で政府と対決した田中正造が国会で質問をするなどの動きもありましたが、根本的な解決は農地改革まで全うされることはありませんでした。

特に十余二地区は東京窮民の入植が遅れたため入植者は少なく、管理者であった三井組が積極的に会社持ちの小作人を受け入れました。彼らは近在の村の出身者でありました。彼らは団結力も強く、上記裁判闘争の主体となっていました。

注1：1反=300坪（約991.7m²）1畝=30坪

(5) 三井組の施策

十余二地区を管理した三井組は市岡晋一郎を代人として経営にあたらせました。市岡は裁判に対しては非常に非妥協的な態度で臨んだため、闘争が長引いた一因となりました。しかし殖産では積極的に勸農事業を行いました。明治4(1871)年には養蚕と製茶を始めました。また植林にも力を入れ、明治14年(1881)には製糖会社を設け琥珀甘藷こはくがんしょから製糖を行いました。

村の建設にも心を配っていたようです。明治7(1874)年十余二に私立の小学校を建設し、開墾地の子供たちの教育に尽力しました。この学校は授業料もなく、教具や教員の給料も三井組が負担し、近隣村からも入学者を多く受け入れました。

市岡はまた、ほとんど三井の寄付で皇大神社という村社を建設し、村の精神的支柱を作りました。

(6) 開墾事業の実態

開墾地の農業は困難を極めました。土地はサラサラの赤土で地力が弱く、また水利もよくないため、陸稲以外米作りにはあまり適していませんでした。そのた

め開墾地では商品作物の導入が積極的に行われました。三井組は明治14(1881)年十余二村精糖会社を設立し、サトウキビ(琥珀甘蔗)の生産を奨励しました。しかし農民の技術が未熟で粗悪なサトウキビしか生産できなかったため、採算があわず会社は明治17(1884)年に解散しました。その後もいろいろな作物を導入しましたが、あまり成功しませんでした。しかし農民の努力の結果、十余二ではサツマイモの栽培に成功し特産品となりました。

大正時代から昭和にかけて‘紅赤’という品種を導入し、そこで生産された「十余二赤」というブランドのサツマイモは甘みが強く、焼き芋用として、東京で人気を博しました。農民は栽培方法にも工夫を重ね、高級品としてブランド化に成功したのです。しかし第二次世界大戦中に食料増産が奨励され、収穫量の多い品種にとって代わり、姿を消してしまいました。

3. 軍事基地

(1) 陸軍飛行場の建設

第一次世界大戦時期、戦争遂行のための兵器が飛躍的に発達しました。特に航空機の発達は、各国の脅威となり、航空機による攻撃に対処するための防空兵器の開発や防空諸施設の開発・整備が進められました。

日本でも大正期から飛行部隊の組織化が開始されましたが、昭和期に入ると、「国土防空」特に「帝都防空」が議論されるようになりました。「帝都防空」=「東京防空」のために、東京近郊に飛行場を建設することが必要とされました。そして陸軍が注目した土地は畑地が大半を占めていた東葛地域でした。昭和12(1937)年6月、陸軍は十余二に新飛行場を建設することを決定し、翌13(1938)年11月柏飛行場が完成しました。

柏飛行場は「帝都」防空の第一線の航空基地となり、第二次世界大戦末期にはアメリカ軍B29の迎撃基地ともなりました。

またロケット推進戦闘機「秋水」の開発基地ともなりました。周辺にはこのための燃料貯蔵庫なども作られていたことが知られています。

十余二の地元の農民はこの飛行場建設のために土地、家屋を強制的に徴用されました。本来小作地なので所有権はありませんでしたが、耕作権は補償されず、近隣の農民が耕作権を融通して耕作を助け合ったそうです。また飛行場の建設

には近在の小学6年生を含む13歳以上の男女が勤労奉仕に動員されました。赤土なので、赤い土が舞い上がり息もできないくらいだったといえます。

参考文献

「柏市史近代編」、柏市史編さん委員会、平成12年

「柏のむかし」、柏市史編さん委員会、昭和62年

「柏の歴史よもやま話」、柏市民新聞社・浦久淳子、1998年、崙書房、流山市

「歴史ガイドかしわ」、柏市史編さん委員会、平成19年

柏市とその周辺の歴史年表

※本年表は「郷土かしわ」の歴史年表をベースとし、末尾欄外に示す引用・参考文献より重要と思われる「できごと」を補足した。

時代区分	西暦	年号	主なできごと
原 始 文 時 代	約4万年前 約3万年前		<ul style="list-style-type: none"> ・日本列島に最古の明確な石器が出現 ・常磐自動車道柏地区に旧石器時代の遺跡が現れる（聖人塚、中山新田、元割遺跡など） ・環状ブロックの形成（中山新田Ⅰ遺跡） ・長期間の人々の営み（聖人塚遺跡） ・本の木型石槍の生産（元割遺跡）
	約1万5千年前	草創期 早期 前期 中期 後期 晩期	<ul style="list-style-type: none"> ・土器の使用が始まる ・狩猟や採集の生活が続く ・本格的なムラがつくられ始まる（鴻ノ巣、花前遺跡） ・前期前葉の黒浜式期の集落が出現（若葉台遺跡、花前Ⅰ遺跡） ・貝塚を中心に大集落ができる（布施貝塚、林台遺跡） ・中期前葉の阿玉台式期の集落が展開（聖人塚遺跡、中山新田Ⅰ・Ⅱ遺跡、水砂遺跡） ・中期中葉～後葉の環状集落（小山台遺跡） ・中島遺跡、岩井貝塚 ・宮根遺跡
弥 生 時 代	前10世紀後半～前8・7世紀 紀元後 239		<ul style="list-style-type: none"> ・大陸から北九州に稲作が伝わる ・大陸から青銅器、鉄器が伝わる (今のところ柏市内では弥生時代 早・前・中期を示す明確なものは発見されていない) ・邪馬台国の女王卑弥呼が倭国王になる ・笹原、中馬場遺跡（弥生後期）
	538 593 飛鳥時代 607 645 646 701	大化元 大化2 大宝元	<ul style="list-style-type: none"> ・前方後円墳がつくられる（大王が支配する大和政権） ・戸張一番割、戸張城山、石揚遺跡（古墳前期） ・北ノ作1号・2号墳 ・弁天古墳（古墳・中期） ・花野井大塚古墳 ・小規模な集落が出現（花前Ⅱ-1遺跡、矢船遺跡） ・集落規模の拡大（上貝塚遺跡） ・百済から仏教伝わる ・聖徳太子が推古天皇の摂政になる ・柏・我孫子あたりは朝廷の御名代（みなしろ）として直接支配される ・小野妹子を遣隋使として隋に送る ・市内各所に小円墳がたくさんつくられる ・総の国を二分して南部を上総、北部を下総とした ・大化改新の詔が発布される ・大宝律令ができる ・下総国府（市川市国府台）置かれる ・根戸周辺に大集落ができるようになる（中馬場遺跡）
奈 良 時 代	710 721 741 771	和銅3 養老5 天平13 宝亀2	<ul style="list-style-type: none"> ・平城京（奈良）に遷都 ・この頃鉄器生産を伴う集落の出現（花前Ⅰ遺跡、花前Ⅱ-2遺跡） ・養老5年「下総国倉麻（そうま）郡意布郷（おふのさと）」戸籍つくられる（ほとんどの人が「藤原部」姓をもつ） ・国分寺建立の詔 ・下総国分寺建立 ・武蔵国-下総国-常陸国（東海道）の交通が多くなり、駅馬が増強される
	794 823 935 1126 1130 1156 1167	延暦13 弘仁14 承平5 大治元 大治5 保元元 仁安2	<ul style="list-style-type: none"> ・平安京（京都）に遷都 ・この頃本格的な製鉄の展開（花前Ⅱ-2遺跡） ・空海、布施弁財天に紅竜山東海寺を建立（東海寺縁起による） ・平将門反乱をおこす ・相馬御厨成立 ・平常重、布施郷（相馬御厨）を伊勢皇太神宮領に寄進（志子多谷、手下水海の名みえる） ・保元の乱に、千葉介常胤（相馬郡司）、源義朝に従って参加 ・平清盛が太政大臣となる

時代区分		西暦	年号	主なできごと	
古 代	平安 時代	1180	治承4	<ul style="list-style-type: none"> 源頼朝伊豆に拳兵 千葉一族協力する 	
		1185	文治元	<ul style="list-style-type: none"> 千葉介常胤本領安堵（相馬御厨の下司職）を得る 守護, 地頭の設置 千葉介常胤「下総一國守護職」に補任 	
中 世	鎌倉 時代	1192	建久3	<ul style="list-style-type: none"> 源頼朝征夷大將軍に任ぜられ, 鎌倉に幕府を開く 	
		1204	元久2	<ul style="list-style-type: none"> 相馬次郎師常（常胤の次男）没 	
		1227	嘉禄3	<ul style="list-style-type: none"> 相馬五郎能胤が娘土用（むすめとよ）に相馬御厨内の手加, 布瀬, 藤心, 野木崎らをゆずる 	
	南北朝 時代	1334	建武元	<ul style="list-style-type: none"> 建武の新政 	
		1338	延元3	<ul style="list-style-type: none"> 足利尊氏, 征夷大將軍となり幕府を開く 	
	室 町 時代	戦国 時代	1462	寛正3	<ul style="list-style-type: none"> 高城胤忠, 根木内城構築
			1467~77	応仁元	<ul style="list-style-type: none"> 応仁の乱
			1478	文明10	<ul style="list-style-type: none"> 太田道灌, 国府台に陣し, 千葉孝胤と境根原で戦う
			1537	天文6	<ul style="list-style-type: none"> 高城胤吉, 小金大谷口城構築
			1538	天文7	<ul style="list-style-type: none"> 北条軍と小弓軍国府台に戦う 北条軍勝利
近 世	安土 桃山	1564	永禄7	<ul style="list-style-type: none"> 国府台後の戦, 里見氏, 北条軍に敗れる 	
		1573	天正元	<ul style="list-style-type: none"> 室町幕府滅ぶ 	
		1590	天正18	<ul style="list-style-type: none"> 豊臣秀吉の統一 高城氏滅ぶ 	
	江戸 時代	戦国 時代	1600	慶長5	<ul style="list-style-type: none"> 関ヶ原の戦い
			1603	慶長8	<ul style="list-style-type: none"> 徳川家康將軍となり江戸に幕府を開く
			1614	慶長19	<ul style="list-style-type: none"> 江戸幕府, 小金三牧と佐倉七牧を管理する
			1616	元和2	<ul style="list-style-type: none"> 幕府七里ヶ渡を定船場とする 本多正重が相馬郡内に1万石を領す
			1641	寛永18	<ul style="list-style-type: none"> 江戸川開通
			1641~43	寛永18~20	<ul style="list-style-type: none"> 寛永の大飢饉
			1654	承応3	<ul style="list-style-type: none"> 伊奈備前守忠次, 利根川東遷に成功
			1663	寛文3	<ul style="list-style-type: none"> 大青田村と船戸村の草場をめぐる争いで双方の名主入牢
			1671	寛文11	<ul style="list-style-type: none"> 江戸商人（海野屋作兵衛ら17名）による手賀沼干拓始まる
			1702	元禄15	<ul style="list-style-type: none"> 大室村と高野村草場をめぐる争いで3人死に, 双方の名主入牢
			1708	宝永5	<ul style="list-style-type: none"> 戸張村と大井村草場をめぐる争い
			1724	享保9	<ul style="list-style-type: none"> 利根川沿いに流作場生まれる 布施河岸が正式に成立
江戸 時代	戦国 時代	1725	享保10	<ul style="list-style-type: none"> 小金原で將軍吉宗鹿狩, 村々より勢子, 人足差し出す このころより代官, 小宮山奎之進, 牧付新田を開発させはじめる 	
		1726	享保11	<ul style="list-style-type: none"> 小金原で將軍吉宗鹿狩 	
		1727	享保12	<ul style="list-style-type: none"> 幕府年貢増収をねらって手賀沼干拓を始める 	
		1729	享保14	<ul style="list-style-type: none"> 手賀沼開墾により千間堤完成(5年後決壊) 手賀沼干拓竣工 	
		1732	享保17	<ul style="list-style-type: none"> 享保の大飢饉 	
		1737	元文2	<ul style="list-style-type: none"> 藤ヶ谷に鮮魚街道石橋が作られる 	
		1738	元文3	<ul style="list-style-type: none"> 千間堤洪水により決壊 	
		1745	延享2	<ul style="list-style-type: none"> 手賀沼再工事竣工 利根川洪水のため千間堤再決壊 	
		1748	寛延元	<ul style="list-style-type: none"> 水戸公, 小金原で鹿狩, 帰途, 弁天で参詣 	
		1783~87	天明3~7	<ul style="list-style-type: none"> 関東一帯大飢饉(天明の大飢饉) 	
		1787	天明7	<ul style="list-style-type: none"> 寛政の改革始まる 	
		1790	寛政2	<ul style="list-style-type: none"> 船戸・小青田等16ヵ村・水戸公の鷹場の免除を願い出る 	
1795	寛政7	<ul style="list-style-type: none"> 小金原で將軍家齊鹿狩 			
1849	嘉永2	<ul style="list-style-type: none"> 小金原で將軍家慶鹿狩 			
1853	嘉永6	<ul style="list-style-type: none"> 黒船渡来で世間騒がしくなり水戸街道の往来がはげしくなる（助郷増加） 非常時（黒船渡来）のため, 村々から船戸, 藤心詰足軽勤番差し出す 品川沖へ御台場建築のため根戸村御林から木材を江戸へ送る 			
1855	安政2	<ul style="list-style-type: none"> 下総布川の儒医, 赤松宗旦「利根川図誌」を著す 			
1867	慶応3	<ul style="list-style-type: none"> 大政奉還 			

時代区分	西暦	年号	主なできごと	
近代	1868	明治元	・旧領主本多紀伊守、駿河から安房国長尾藩（現南房総市白浜）へ移封	
	1869	明治2	・葛飾県の支配となる	
	1871	明治4	・小金、佐倉牧開墾会社設立、小金・佐倉牧廃止 ・ 廢藩置縣	
	1873	明治6	・葛飾県を廃止、印旛県となる	
	1873	明治6	・下総開墾会社を解散	
	1879	明治12	・豊四季村、十余二村誕生 ・千葉県となる ・第1回県会議員選挙、成島巍一郎（布施）、木村作左衛門（名戸ヶ谷）当選する	
	1888	明治21	・藤ヶ谷に鮮魚街道常夜灯造立	
	1889	明治22	・利根運河の工事始まる ・ 大日本帝国憲法発布 ・ 市町村制施行	
	1890	明治23	・富勢村・土村・田中村・千代田村・手賀村・風早村誕生	
	1894	明治27	・利根運河完成	
	1896	明治29	・ 日清戦争始まる	
	1897	明治30	・常磐線（当時日本鉄道株式会社土浦線）、田端～土浦間開通、柏駅開設	
	1901	明治34	・成田線開通（成田～佐倉間開業）	
	1904	明治37	・成田鉄道（現成田線）我孫子～安食間開通（成田直通は翌年）	
	1911	明治44	・ 日露戦争始まる ・県営軽便鉄道 柏～野田間開通（現東武アーバンパークライン）	
	大正	1914	大正3	・ 第1次世界大戦始まる
		1920	大正9	・陸前浜街道は国道六号となる ・第1回国勢調査実施 柏市域人口24,908人
		1923	大正12	・ 関東大震災 ・北総鉄道株式会社、柏～船橋間開通（現東武アーバンパークライン） ・東葛飾中学校（現東葛飾高校）開校 ・詩人「八木重吉」が東葛飾中学校に赴任 ・柏郵便局に電報、電話事務取扱
		1926	大正15	・千代田村、柏町と改称（9月15日）
昭和		1928	昭和3	・豊四季に柏競馬場できる
	1938	昭和13	・十余二に陸軍柏飛行場建設始まる	
	1939	昭和14	・ 第2次世界大戦始まる	
	1941	昭和16	・ 太平洋戦争始まる	
	1943	昭和18	・この頃柏町に軍需工場ができる	
	1945	昭和20	・ 広島、長崎に原爆投下、日本無条件降伏	
現代	1947	昭和22	・利根遊水地の築堤始まる	
	1949	昭和24	・常磐線松戸～取手間電化	
	1952	昭和27	・国道6号整備着工（50年完成）	
	1953	昭和28	・南柏駅開設	
	1954	昭和29	・柏町、田中村、小金町、土村が合併「東葛市」となる ・小金町の大部分が松戸へ合併 ・東葛市に富勢村の大部分を編入し柏市誕生（11月15日）	
	1955	昭和30	・手賀村、風早村が合併し沼南村となる ・国勢調査 柏市の人口45,020人、沼南村人口10,911人、合計市域人口55,931人	
	1957	昭和32	・米軍柏通信所（キャンプ・トムリンソン）開設 ・国道6号（小金～青山間）で全線開通（12月）	
	1964	昭和39	・ 第18回オリンピック大会東京で開催 ・沼南村が沼南町となる ・柏市人口10万人突破（11月） ・国勢調査 柏市の人口109,237人、沼南町人口15,262人、合計市域人口124,499人	
	1970	昭和45	・ 日本万国博大阪で開催 ・国道16号（野田～千葉間）全線開通（4月） ・柏市人口15万人突破 ・沼南町人口2万人突破	
	1973	昭和48	・柏駅東口再開発事業完成 東口ダブルデッキができる（10月）	
1975	昭和50	・ 海洋博、沖縄で開催 ・柏市の人口20万人を突破（5月）		

時代区分	西暦	年号	主なできごと		
現代			・国勢調査 柏市人口203,065人、沼南町人口22,150人、合計柏市域人口225,215人		
	昭和	1979	昭和54	・米軍柏通信所（柏の葉）全面返還（8月） ・沼南町人口3万人突破	
		1982	昭和57	・柏市の人口25万人を突破	
		1985	昭和60	・科学万博、筑波学園都市で開催 ・常磐高速道路一部開通（柏～三郷） ・国勢調査 柏市人口273,128人、沼南町人口38,027人、合計柏市域人口311,155人	
	昭和	1987	昭和62	・運輸政策審議会において常磐新線の整備を答申（7月）	
		1988	昭和63	・柏市立十余二小学校開校 ・沼南町人口4万人突破	
		1989	平成元	・柏市の人口30万人を突破（5月） ・国勢調査 柏市人口317,750人、沼南町人口45,130人、合計柏市域人口362,880人	
	平成	1991	平成3	・税関研修所移転 ・柏の葉公園一部開園 ・千葉大学園芸学部附属農場設立 ・1都3県は宅地・鉄道一体化法に基づく基本計画を策定し、運輸・建設・自治大臣が承認	
		1992	平成4	・国立がんセンター東病院開院	
		1994	平成6	・常磐新線起工式（秋葉原～新浅草間）（10月）	
		1996	平成8	・緑園都市構想策定（3月） ・さわやかちば県民プラザ開館	
		1999	平成11	・科学警察研究所移転 ・東京大学の物性研究所・宇宙線研究所が柏の葉キャンパスへ移転	
		2001	平成13	・常磐新線新名称を「つくばエクスプレス」に決定（2月） ・柏ゴルフ倶楽部閉鎖（9月）	
		2003	平成15	・千葉大学環境健康都市園芸フィールド科学教育センター設立	
		2004	平成16	・柏市制50周年記念式典を挙行 ・つくばエクスプレス開業「柏の葉キャンパス駅」「柏たなか駅」誕生（8月）	
		平成	2007	平成17	・国勢調査 柏市人口380,963人
			2008	平成20	・県立柏の葉高校開校 ・中核市となる(4/1)
			2011	平成23	・柏の葉国際キャンパスタウン構想策定（3月） ・柏の葉キャンパスを中心とし、内閣府より「総合特区」及び「環境未来都市」の対象地域として指定（12月）
			2012	平成24	・柏の葉小学校開校（4月）
2014			平成26	・柏市制60周年	
2018			平成30	・柏市立柏の葉中学校開校（4月）	

（引用文献）

- 柏市教育委員会. 2018. 郷土かしわ地理・歴史・公民編 平成30年度版. P99-114
 柏市市史編さん委員会. 2007. 歴史ガイドかしわ. P238-241. 柏市教育委員会
 柏市教育委員会. 2014. 柏市郷土資料室揭示 柏市略年表
 (公財)千葉県教育振興財団. 2017. 常磐道の遺跡展図録
 柏市議会事務局. 2018. 市政概要 平成30年版. P275-277

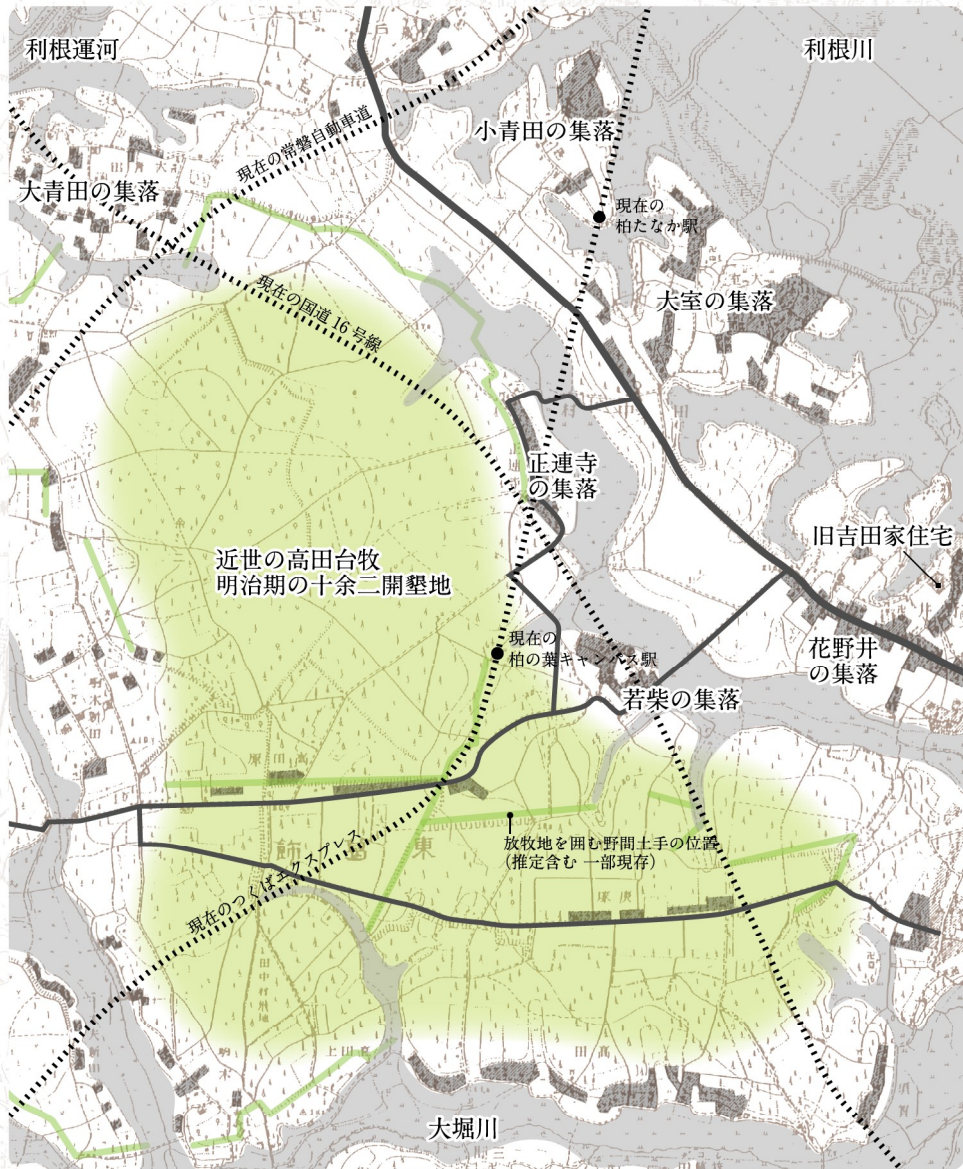
（参考文献）

- 柏市史編さん委員会. 1980. 柏市史年表. 柏市役所
 柏市役所（最終更新日2018.1.11）柏市の歴史 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020300/p000077.html> 2018.8.27参照
 柏市役所（最終更新日2017.3.8）旧沼南町の概要 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020100/p000138.html> 2018.8.27参照
 柏市役所（最終更新日2018.7.2）柏市統計書 平成29年版 柏市の沿革 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020800/p008433.html> 2018.8.27参照
 柏市役所（最終更新日2018.5.23）柏市都市計画マスタープラン平成30年4月 p7 都市の変遷 www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/140300/p045777.htm 2018.8.27参照

「私たちの柏の歴史～牧から街へ～」制作プロジェクトチームメンバー

統括・代表	野田勝二（千葉大学環境健康フィールド科学センター） 大鷹秀生 笠羽英男 河合都志子 今野尚子 齋藤優子 下重野乃香 常盤 猛 中山千花 浜口勝美 校條邦夫 山口政子
制作協力	高野博夫（柏市生涯学習部文化課）
表紙・裏表紙デザイン	大野将司
印刷協力	柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）

発行者：千葉大学柏の葉カレッジ・リンクプログラム
野田勝二
発行日：2021年6月30日
千葉大学環境健康フィールド科学センター
〒277-0882
千葉県柏市柏の葉 6-2-1



昭和初期までの柏の葉地域 (UDCK)

私たちの柏の歴史

— 牧から街へ —

History of *Kashiwa*

千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム